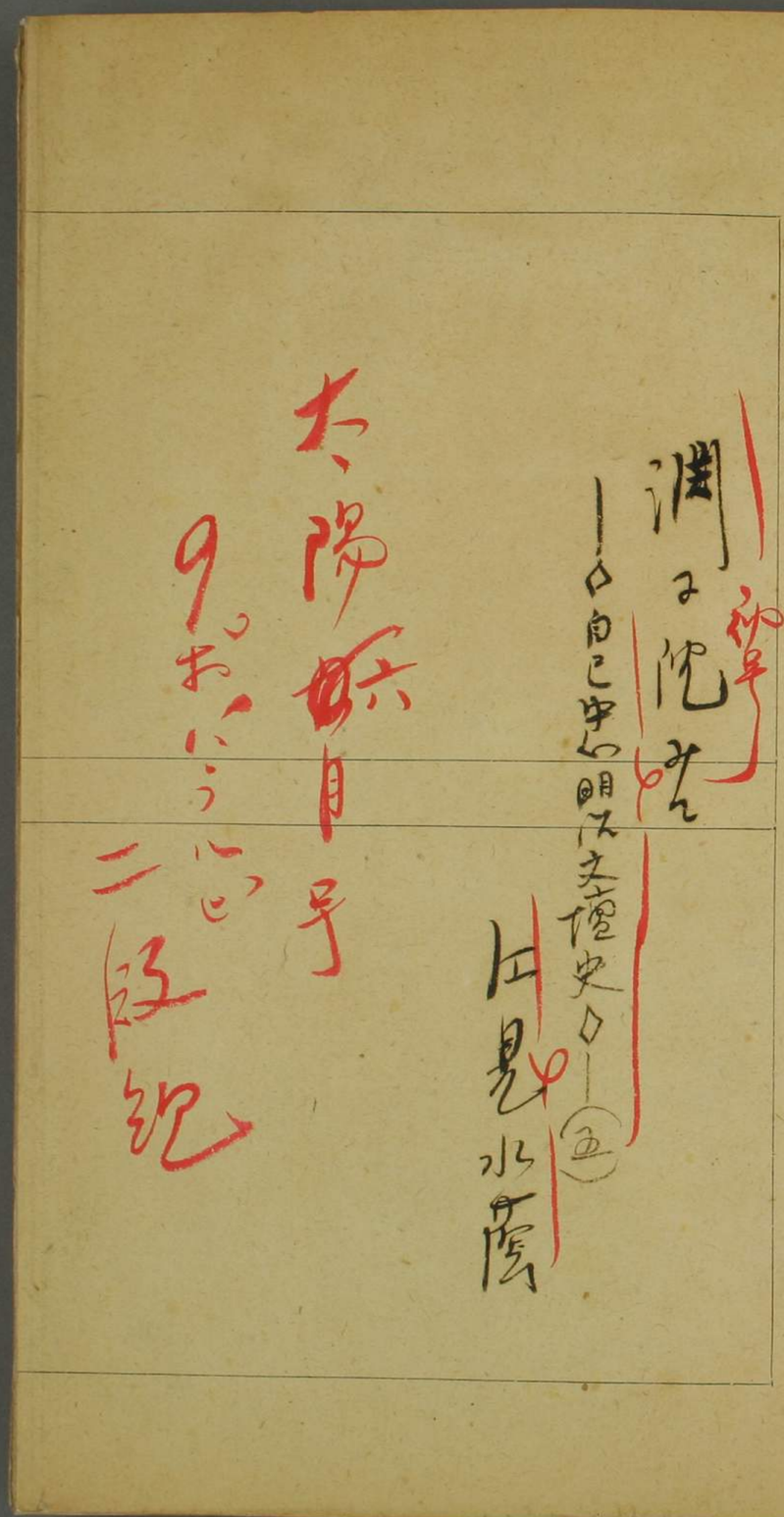
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

へ14
4424
3

東京帝國大學圖書

特
へ14
4424
3



淵は沈む

↓自己中心明治文壇史↑

瘦文士の新家庭

明治二十三年の夏を通じて

江見水蔭

明治二十三年五月、自分は東京に初めて一家を成した。郷里の花田を呼寄せたので有った。それは牛込北町一番地で、宇田川準と云ふ理学者の家作で、道の角に当り、その形は甚だ僅で現なしてゐる。紅葉の四十一番地の邸向ふに当って居た。

自分は今でも紅葉が好きだ。学ぶべき点を教へを請ふべく、猫国で近所に居を求めたので有った。杉浦重剛氏の描写に人力車に借りぶ

No.

苗を積んで積合いれるので。母が到着せぬ五日間は、食パンを買ってきり、紙袋にて食べ暮しをりしに。紅葉の家からは西三度、丼鉢に米飯を入れて[illegible]れる。

それで第一日の晩餐には、牛肉を買って来て、神棚を庭下を取り[illegible]を[illegible]ッ切って、紅葉小説の二人[illegible]を祝盃を挙げるので有った。

[illegible]中悪ずれの[illegible]物はづくしの中に。

0000 しき物は一水蓮の新世帯

0000 ふし

0000

と有った（家賃四円）

夢が、家は西日が強烈に射し込むので、そ

れに風通しが悪いため、盛夏を成ってのぶ溜ふく暑かった。そこで自分は、いよ〳〵新著百種の日の舞台を狙ひ、懸命の懇依を寄せるつもりで、そのうちに何分窓下は直ぐ往来で、行通の音響が蒼蠅く、又向ふ角が酒屋で人の出入りが多く、迷惑の気が数々て執筆が出来ぬ。甚頃[illegible]芝白金の今里町[illegible]転じて北原の家に[illegible]りに行って、其所の二階下の物置を能居として家賃といふ代小説を書上げた。

併し、如何にして新著百種へは掲用さ

れるかうれ[redacted]さうして自分より後に入社した
後部し羽庵の『露[redacted]』小説が仮第一として、其第
十篇として[redacted]十月に出版されれ（挿畫の一ツを寺崎山廣業が
書いた。乙羽庵「同宿」すれ親友関係で有れ。）
[redacted]それを紀葉の新川町の富谷で、社中の合評
會[redacted]（[redacted]が働けん事が）有れ。[redacted]
『叙客』の落第は吉岡書店（主人は理学士
吉岡哲太郎）の毛嫌ひをされれるすると思
はれる。勿論[redacted]拙作では有れるが、併し
自分としては寄る心血を注いで[redacted]創作し[redacted]れるので、
[redacted]それが何時行くも紀葉の歓迎を

4巳

[redacted]

拾せて有るので、何んとも云へぬ悲哀を感
ドれので有れ。
一方、[redacted]を叩んで一家を成しれので、金の
[redacted]事はふふで無かれ。それで紀葉の
今で『読賣』へ賣って賣って、十五円を得れ。（十月一日掲載された）
これが新聞へ出る中、金港堂の編輯員のへ
行れ処が、藤本藤陰が。
『中根氏』と話しれ事だが、『紀客』は惜しい事
だ。『都の花』へ賣へば良かれのでと云
はれれので、初めて愁眉を開いれので有れ。

之れを江湖新聞で（四月）皮肉と詆罵されたのである。（百橋丈八月からの事）現文社の著者が、「文庫」を発行してゐる。糟糠の妻たる「文庫」を抛擲して、「文庫」の状態を成してゐる。

自分は紅葉の命に従ひて、匿名で取消し文を出したとのこと。（四月）二十日頃まで紅葉は絶えず打ち出るといふ意味である。

ゆめゆめ実現されまじ。代りて「江戸」が吉岡の手を離れて、紅葉自身の経営で、現文社から発行された。（創刊は六月二十日。）編輯人名義は、廣津直

A 1020 青山 三河屋紙店製

人（柳浪）発行兼印刷人は喜多川金吾（麻陰居士と號し中坂時代から事務及び会計を司る）傍ら真美人の著書も有る。拙なれども真面目な人ふりで、打解け交際が無かつたる、幹部は成るべく今は建築工業を従事してゐる。

雑誌は月二回発行（五日、二十日）二段組十八頁の簡素な物で、一部定價三錢で有る。

これらは現文社外の人々寄稿した（依田学海、北尾次郎等）正直正右衛門（地）創作

No.

は、小説の「秋の雫」や「紅葉の」
「かれ枝帳」の「化」、評論めいた事を、主として
紅葉が執筆した。それは正当な方法の為で
有った。（眉山の俳文は天下一品で有ったが、それは文学とは
この時代は、雑誌よりコマ（遊戯）を入れると
すれば、それは仮版のお仕着せで、掘り出
った俗悪な物ばかり用ふるかった。それを
「江戸名所」では、桂舟に依頼して、意匠的な新
コマを毎号製作して挿入した。唯それだけの
事で有ったが、新らしい試みとして評判さ

（遊戯　当人は　飾り果　意気成　ふふかん）

れた。

同誌で「文壇十傑」を読者の投票で選んだ
事が有った（其の投票数は少かったが、
それだけ又真面目で、自己宣伝の運動もない
ものは無かった。）

露伴　八〇
紅葉　八〇
美妙　八〇
南翠　七〇
雪村　七〇
遊遙　六〇
柳浪　五〇
鴎外　四〇
嶺月　四〇
三重吉　三〇
三眉山　三〇
三味線　三〇
三軒茶屋　三〇

眉山、五月（各二〇）春雪、得知、思案、學鶴軒（各一〇）自分は赤が一点多くふるつたが故に、それ（江戸紫山が硯友社の機関である）それが驚愕を擴張すると之つた様な野心が有つたとすれば、水蔭は一点多く無かつた傳で発表せずとも、小細工はイヤラで出来ないのだが、公平な持主。徐世点坊くの如く[illegible]である。これ。すぐ閑を作つたと誣言する者の有るのは、恍惚を耐えぬ。

自分はこの江戸紫山で、初めて虚曲の澪標佐々木[illegible]細を発表した。

此時分、春陽堂からは『美術世界』とゝぐ

本版色刷の繪畫雜誌が出てゐた。それからの思ひつきが如何か、同堂から木版摺で『新作十二書』といふのを出し始めた。之は大家のを十二人揃へる計畫で、第一冊目は勝間村の勝間[illegible]を出した。[illegible]侍し美術は当時の人目を驚かれが、其作は不評で有つた。それは輕妙洒脱な[illegible]得意の人が、拙く思ひ時代物を書いたからで有つた。

其後紅葉が引受けたので有つた。此ぬし[illegible]がそれで、それを大無氣で書きぶりが、[illegible]の紅葉は荒木の[illegible]人達の手前、大学へ行くのを

[redacted]が知れては、
四角帽を刺形を着て、黒[redacted]の剥げた折鞄を
抱へて、自分を[redacted]すと、直ぐ所如何ふの（入口は横
[redacted]）自分の家へ[redacted]
[redacted]自分の使
用してゐる紙[redacted]を占領して、一気呵成に書い
てゐる。わづか三日ばかりで脱稿した。遅筆
家の紅葉さへ珍らしかつた。
内の徳は（紅葉の実名徳太郎）は頃学校へ行つてすぐ帰
る。
荒木学海老人が、心配しては自分を断る[redacted]訳
がゐるので、困つた事が有つた。

A 1020 青山堂西園紙店製

8三

淵に沈みて

○自己中心明治文壇史

紅葉生

紅葉の男世帯

明治二十三年の秋の頃

尾崎紅葉が塩冢山に庵室を手傳はせて、本郷
喜川町に男世帯を張つた事が有つた。それは今の
様に電車の無い時代の事ふりで、大学へ通ふ
のに、牛込ばかりでは不便だといふ口実で、北町

は荒木の老人ち姉だけが遺つてゐる。併し、それは尾崎が老人の手前、一寸方便を設つたので、大学は詰ふない。今更[illegible]の[illegible]

かつて（川上眉山、石橋思案、この二人は其[illegible]を聴く[illegible]有るすくといふので、殆ど登校はしふ通りで有つた。）

紅葉は前述の通り[illegible]れ通り色懺悔から来た躍進作家と成り、寄寄新聞社に入社して、その短篇物が一を勘迎さん、引つゞきて長篇物

伽羅枕の嗜表を掛つた時代ふので、大学（露伴は同時に入社した。20 青山三阿蓋抵居録 いげ男を書きつゞけて、中途で退社した。）

紅葉が貧の俳号花瘦（後中村柳園を譲る）で江戸時代第十号まで新居吟を載せてゐる。

貧中の三三 麁食 初鮭 噂を聞きて貧を

が実際詰ふが、どの道通学ふんかしれく無かつたのだ。いれども大学を止めるといふ事は、老人達へ對して出来ないと見えて、それで霜川町へ別居と成つたのだ。

此所へ我々が毎日の様に押掛けて行つたのは勿論で有つた。

伽羅枕の女主人公――佐右夫の市路、くちやの老婆を紅葉は紅枚――これは前記の二宮某で、紅葉はその老婆の身の上話を聴いて、それを元銘文体で小説化したので有つ

た。

森川町時代に初めて俳句の研究を始めた。そしてそれを今の紅葉と呼んだ。紅葉の説で「俳諧は実に観察が鋭く、寸句で非常に力の強い云ひ方をする。之は小説家としても学ぶべしで、格調と文章を煉る為に有った。」と云ふ様な意味で「田螺」と「櫻」との最初の課題が有った。

指折る何と云はうぞ初櫻　漣

鄙歌や或る山寺の初櫻　水蔭

ゆるせ〳〵寡婦の家に初櫻　眉山

物言はゝ一枝さくらむ櫻花　柳浪

未だ示すこなれ鉄ある櫻哉　九華

腰のして老の若やく櫻哉　虚心

鮫接いて風きりすくん家櫻　紅葉

叔父門前そぼ〳〵と見る田螺哉　眉山

ちさものを庭中の珠田螺哉　紅葉

籠に入れて飼へるものもあり田螺　漣

打つて出て同一枕の田螺哉　柳浪

繪の中に声ありと見る田螺哉　眉山

紅葉が其頃の俳號花瘦として『江戸会』第十号に『新居吟』といふのを載せてゐる。

無俗
裏枯や度はとるまん墓所
麁食
初鮭は隣る聞きと豆腐うる
野興
朝炊や睡寿覚しの雁の声
寓居
恋ふくて淋しく立てる寒山寺
樂津（寒山人同居）
下戸日士圃　粉はぐ弓後の月
僻境
歌の思し森川町の秋の暮

この様な甚だ幼稚な句ばかりで、俳し互選の際は議論百出。衣の更けるを知らぬ程で有つた。

この森川町へ紅葉が訓合しれる就て、最一ツ内密の原因が有つたのだ。それは青年期を免れぬ異性との交際を就て、老人達の側では如何ッて厳度を感じた結果と考へられるのだ。

但し、誤解は解けて貰ひたい。それは本統に純潔な意味での交際で有つた。今けど男女間の交際が自由で無かつた。

二十三年頃までは、文士として最も必用な女子観察は最も不便を感じてゐた。

それで一時神田連雀町の「デ金」（萩琴書）の横町向一今の某病院）を我々の倶樂部の様なして、講武所塾など呼んでゐたが、紅葉が『夢幻』と入れ替りに、忽ち紅葉熊熟といふのが『夢幻』に入れ替りに、

それは『夢幻』の直後連中、子安峻とか、本野盛亨（本野一郎の父）といふ人達が

A 1020 青山三河屋紙店製

紅葉館の設立者の一味だけで、饗宴の宴会と云へば、必らず紅葉館へ持出されるのである。

一寸一寸小さな絵額が有つても、直ぐと行くと云ふ風で、高田早苗先生を初め、中井錦城、藤野房次郎、頼川光行氏などいふ人を伴はれて紅葉館に能く行つたものだ。

中西梅花氏の饗宴に入社してゐて、これが館の某女に失恋して、発狂はそれが為だと傳へられた位で有つた。

A 10 20 青山三角屋紙記帳

紅葉館の今とは組織が異つてゐて、高貴の方々や華族連、実業家の就き連の高尚な遊ぶ所が目的で、某女中達、芸者達の気位が高く、姿も優れて、昔の侍女中が、藤元風が八分、その二分の艶姿が有つた位で、藝者位で、私家の娘ぶり、行儀作法を教へられたのだ。無論美人揃いで有つた。

中井氏は書生の身で、紅葉館へ文名が高いとは云へ、紅葉館に成つた行くそうな成つたのだ。別世界を感じんだ感を持つて、忽ち有頂天と成つたのは、

書生連の行く処では無いので有つた。

当然で有る。

女性観察子は紅葉館を限る。君さんが、女子を知ふ。ぶさ四ぎる。連れていてやる。

紅葉は、讀書の車中と行くばかりでは物足りないので、汽車の小説、眉山、思案、柳眉、桂舟、ひ羽、花袋、虚心、などを引率して、紅葉館へ能く出掛けた。（料理一式二の膳付きでお酒なしで七十五銭。）

酒飯代

一円位で有る。これから電燈は暗く思く、燭台で有る。成るべく袴羽織で行くがよいと曾がさんが

自分は紋付の羽織を着れる。

順々に

隆は、紅葉思案小説と借着をして行くので、行く

其定隆は、紋が幸ふ知れず、人の悪い館が其頃流行した徳永直朝の縁かいふ節の替へ歌を作って、どれが江見さんの紋かいふ山と唄ったは赤面した。

鏡花は、紅葉小説を読みて、まだ自分でゴツ〳〵した一書生と見てるのかしれない。（文士と紅葉館は、まだ語る事は多い。）

長田秋濤翁おきぬ事件さんかズツと後の給仕が、武稚の目的で思いのう男する）

姉くふ風で、唯何とはふく興を誘ふ
ばけの事を語ふて、ズッと後すで紅葉館数
といふまりは綾いれ。紅葉の嘉川町也は、
時館行の冷るまりは最も都合が好いので有れ。

因る絶す。紅葉が花瘦と俳號を附けれの

は、館はまるお花とりふのがすて、それを愛顧
うれ。即ち花は瘦せるので有れ。それを知
ふずる花瘦といふ俳號を譲り受けれ中村柳
園は一後雪後と時に、録稿甘いまんびと、同
人間では笑うれるで有れ。

少し乱れ落ち上る

明治三十三年の晩秋

『絵入朝野新聞』が『江戸新聞』と成り、そ
れから『東京中新聞』と改題される時、共

新社長なる大岡昇平氏は、
[illegible]
のち、紅葉へ小説を続て、相撲を掛ける
時、大新聞と小新聞との区別がいッきり
してるんので、甘中間を行く編輯方針の
京中新聞と名けれのだが、京童の口でナカ新
聞ナカは北廓を意味した——と言んだので、
陸軍の硯海先生が氣づて、後ろ中央新聞と改め
た。
それで紅葉は当時浪人中の広津柳浪を

15巳

同社へ送った。
柳浪は落椿という純文学品を書いた
（挿畫は芳齋で西洋本板を入れた。）
し、当時の読者は、調子が高過ぎて、受け
ぬかった。
それで今度のは自分は、時代物で行ってす
る積りをとりぶん文で、口が掛った。挿畫は桂
舟が当る事になった。
鎌輪坊という名は寄稿し
た。鎌の縫と輪の縫と坊と附けた。縫物題は、

其頃

奇抜で有つた。そして就て「時事新報」で（八月七日）

賞めくさの匂で山田美妙？が悪口を吐いて

のる。「紅葉は情慨して「江戸繁」第五

號を。

「其文中に、藥屋の金看板の題飾りの硯友

ぶり今は古じれ過ぎて……」とあ

り、其くらいか。ふ臣連の硯友社員を淡々

れまふや。此前する眉山の墨染櫻を評

して、硯友社員全体に嘔吐をもよおし文言

有りし。（後畧）

A 1020 青山堂刊 新日本

それから

「都の花」の美妙の小説の書出しの頭文字を

繰換へ不手端さを引いて、一矢報いれの

で有つた。（斯うした反駁は併し江戸繁以後

は、硯友社では絶体に取らぬのつた。）

こんな問題もあり、又当時は珍らしい、

一人稱の自傳体客小説なので、非常に讀者

の歓迎を受けた。

其頃の「国民之友」に掲載月が「代の

批評の前書きとして

し」

（こんど後年、單行本にされた時は、客小説なぞ、浪六の模倣だと云はれが、三日月前に既に自分は

るのを

当時の文壇を紹介してる

発表したのだ。）

左

を掲げる。

（前号）試みる『讀賣新聞』を取り来れば、亂筆狂士の走り書きする『現海水浴傳』

あり。紅葉山人の艶筆を成れる古篇『伽羅枕』長々しく、脱癲子の人を思ふれる古珍話『是ぞ先代萩』まで續くやふ知れず。『国民之友』夏期附録を讀むば、露伴子の『一口剣』あり。『学海居士の『椿』

『お』あり。『思軒居士の『尤憶記』あり。

しかるみ草紙『十一號』は、『鴻外漁史

の『うれひの記』『ながめ星』の『映蓮華』といへるあり。『東京中新聞』を見れば、『柳浪子』の『落椿』『水蔭』の『鎌わぬ方』あり。又『國民新聞』を見れば、『新世帯』と『南翠外史』『桜大』の筆を成れる大篇の小説あり。『女学雑誌』は『うき世』あり。『江戸宗』は『連山人』の『秋の禁』を得顔を翻えれり。世代数ふる遑あらざる中に就き、『奇々子』『思苦子』の感を與へしは『やまと新聞』紙上に於け

る夢のやうな主人の陰陽五和節なる滑稽素人芸を合山是より（後略）

尤も角以上で当時の文壇の大勢が推測せらるるで有つた。

者が此他の当時の文壇を概見する為、文士と俳優との見立、こんなのも作者一句評（諸家嘲るけれども七字軒主人とあるが、野口紅子嘲の悪戯が）などがある。

三の三例を示せば。

二葉亭「ふるさと貴り昔しする事ばかり」煙り（ひまり）ふるさとで蛍の行（ゆく）

A 10 20 青山 巨四堂短冊紙

182

正太夫「行（え）するぶ

「この手合（てあい）が三人居（お）てごろごろ」一足（ひとあし）であの位ふり繰り虫

不知庵「足下（そこ）ですねへチトたんぶまつシ」ちんでよいのは花折る力

（ぶ）

（この評を受けれ）文士の顔鑑なる小説家、飜訳家、他評家（それも学海、揺蕩、龍渓、蘭渓まで取入れて）僅かに二十三人（どれもこれも紅葉が抜けてゐる。或は紅葉自身が一寸悪戯（いたづら）したのか。

192

ゴチ 4
土 居

堂海
宝岑
如電
櫻痴
鉄腸
能淳
忍月
天囚
摘松
半牧
即真
摩村
秋城
思軒

ゴチ 4
亭

三葉
霞亭
春亭
春亭
柳葉
柳塢
柳條
虚心
営亭
香亭
北華
荷文
金外

ゴチ 4
子

湖處子
露伴
柳浪
魁雷
仰天

ゴチ 4
直

滝柿
香風
笠園
蝴蝶
彩霞
蓼洲
蓉葉
柳香

ゴチ 4
や

春のや
嶽のや
松のや
桃のや
竹のや
夢のや
古花や
秋のや
おぼろ
おむつ
みどり
つる彦
望村
櫻痴
かそる
直文

No.

そんなぶばん自分は知ってする答だが、全く記憶が無い。

問題は成る程自分は此の人達が

（中略）

は、自分は四へらんでるん。（八十三人のうー

但し二十三人は決して文士の総数では無かろう。江戸紫で十号（十月五日）発表した作者類聚名彙

は絶ふと、左の如く百五名（但し一人で二ケ所に出てるるもの有る。又誤認もあるが）

原文共傳を発表する

202

4ゴヶ 女子
- 小金井きよ
- 若松しづ 第6表

4ゴヶ 用姓
- 三品蘭渓
- 江見水蔭
- 度辺文京
- 伊東橋塘
- 假名垣魯文
- 鷲庭笠村
- 宇田川文海

4ゴヶ 番外（乙）
- 鉄筆将軍
- 正直正方夫
- 一心命之助

4ゴヶ 生
- 迷花
- 道遥

4ゴヶ 変名
- 南新二
- 三木竹二
- 薫梅月
- 章堂得知

4ゴヶ 番外（甲）
- 緑雨醒客
- 藤蔭隠士
- 諸天情仙

4ゴヶ 実名
- 織田純一郎
- 若松謙澄

No.

8

4ゴヶ 山人
- 漣
- 眉山
- 太華
- 紫山 煙亭
- 懐山
- 夢山
- 柳
- 紅葉

4ゴヶ 庵
- 不知
- 己羽
- 一筆
- 欠伸
- 抱一

4ゴヶ 外史
- 南翠
- 思安

4ゴヶ 道人
- 梅花 漂客
- 三昧

4ゴヶ 小史
- 青萍
- 湖香
- 天香

4ゴヶ 隙
- 美妙
- 弦齋 酔水
- 碧外漁史

4ゴヶ 楼
- 古蒼樣
- 蜃気楼

4ゴヶ 史
- 桃水痴史
- 流水散史

4ゴヶ 仙史
- 柳堂
- 愛花

4ゴヶ 散人
- 抹蕾
- 香雪

4ゴヶ 女史
- 曙 故
- 竹柏園
- 花圃
- 秋月
- 藍江
- 湘煙

4ゴヶ 散士
- 東海
- 北邨 おおむら

A 1020 青山堂無尽蔵

以上は決して完全なものでは無い。強る強
弱と硯水と同一人かと疑つれるほどは、甚だ不
詮索で、面白き對照で有つた。

一年中の總括

明治二十三年の晩秋より年末へ

博文館からは『やまと錦』の後身として、
『日本之文華』なるものが出てゐた。これは
文藝に關する一式の作品を殆ど網羅的に編輯

A 10 20 青山堂紙店製

2/2

して、題る所やらぶ物で有つた。(後の『文
藝共進會』と成り、更に『文藝倶樂部』と
ふ樣な系統を引いたのだ)

小説は頼りを一二篇掲載するに過ぎな
かつたが、これで發表した露伴の『緣外緣』
後の『對髑髏』と題した)は、当時の讀書界を
驚嘆せしめた傑作で有つた。その『日本之文
華』へは、眉山が『風流紅言記』、俊山が『新
學士』、漣は『黒衣聟』、及び『白鬼』など
を寄せてゐた。

社中が斯う博多館を接近してゐるのを、自分だけが遠ざかつてゐるのは花の枝に落葉以来、絶縁してゐるので有る。

連山人――巖谷小波――少年世界――博文館――斯ういふ切つても切れぬ関係を持つたのは、この日本文学の時代のもので。

同館から幼年雑誌をとくふのを発行してゐて、それを連へ――行が序である訳。

子供のが、酷く苦少年物で当つたので、除々に方向を深入りしたものである。

それまでの小説は純粋の小説家で、人情小説の傑作が可成り出たので有る。

この十一月は金港堂から小説叢書を出版する事に成る。

それは新著百種の類型で、その第一篇に自分の「月」が載せられる。これで自分の面目が立つ様に成る。

これは新婚旅行を書いたものである。早く金港堂へ廻つてみたのが、漸くの頃に成れので有る。この時分に宮崎湖處子が「浮沫」とくふ同じ新婚旅行小説を民友社から出して、大評判なので、自分とは兄弟になれるので、それを少からず悲歌してゐる。

夕方神田神保町を散歩して、某書店の店先を覗いて、立つ様な喜んだ。それを買うのを買うのは嬉しいけれど、店先では見られず。手早く持つて僅、九段上、富士見町の桂舟の宅まで大急ぎで走つた。拓魂社の香坂勝造、僅かな原稿が点いてる位で、街頭は何処も暗かつたので、挿畫すらも碌々見られなかつたのだ。

この「櫻月」の合評會は、嘉川町で開かれた。

[illegible]

[illegible]

それから新聞雑誌の批評はじめ。但し、それは支人側が[illegible]筆を執つて呉れたので、正直、不親切、忍月の三大批評家からは、黙殺されてるるので有つた。

「批評家を訪問さるか、批評家を訪問するか」この二ツを脱しては、減多に文壇の[illegible]は[illegible]かつた。自分は実に、どちらも無関係なので有つた。

支人側の好意的批評、それとして決して仲間を擔ぎ上げる様な事はしなかつた。長書を

挙げて短歌を発いれ。其一二の例として東京中新聞の木水子（柳浪）の評を。

（前書）水蔭の筆は勇壮なる人物を写す

は自在すして繊密なる男女の関係を序す

るは其短しとせる事あり殊に水蔭は其好

むる処は癖し景を序するがなる人を忘る

〻事あり世或は其著を評して紀行小説と

の冷評を下すものあるは水蔭のなる惜し

むべし

梅廬生の名で湖山が「江湖新聞」に

A 10 20 青山堂製紙店製

（前書）汚して平常の自動鉄道的の読者

は絵草紙頭痛を刺き起させる多難山岳且山ふ文

学でふし。これが水蔭氏の作か知ら、

何だか人が違ひはせぬかと、疑を疑

はれ。さて水蔭氏脚色を上げられ

る事は（氏所までは好いが、そこらの細

密なアラを拾ひ上げて攻撃さられ）

氏年、発表したれ物は以上の他「屋花川」（

東京新報）「侠家の娘」（閨秀新誌）「袖の月影」

（東京中新聞）等で有る。日本之文学に

寂漠隠士といふ人が雪華と小説界の健筆家のとして、自分を紹介されてゐる位、他作家に比べては奮闘した。が、其二十三年の總收入は、実際百十七円で有つた。（これは八十幾円を江見家の財産中より補充してゐる。即ち一ケ月平均十七円である。三人が共働いで、兄の角之だけを稼ぎ得たといふ事は無学な青二歳としては上々の成功で、老母を故郷から迎へての第一年は、好くして終つたので有つた。

（猶、源れた事実を追記すれば、四月は社中同人と小金井の花見に行き。又江の島

より大等して帰びふどつた。そしてかつかの加賀寺の鋪祭に招かれて、紅葉の『色懺悔』を上演し、遠山（たかやま）を夕介、小四郎（ほんまつ）を小堀が演じた。

又新富座に團十郎左團次芝翫の芝居を、柳浪と共に、東京中新聞記者の資格で見物して、合評を試みた。之が自分の劇評の最初で有つた。

破天荒の原稿料

『明治三十四年の初春』

博文館から子供の讀物として『少年文学』

を発行する事と成って、其一等は小使が黄金丸を、第二等は[illegible]二人[illegible]助を書く事と成った。

その三等賞として自分は創作[illegible]それが[illegible]れで紅葉先生相談して、小使の口から博文館へ申込んで貰った。すると、館主も前から自分を知って居る間柄だから、快諾を得れば其書報を得れば

が、二十四年一月二日で、此日は北町角の新居る紅葉小使屋山の他に極好親の友達が六七人も年賀に来て、盛んに酒を呑んでみんな此で有つ

た。

三日の読売の諸書の雑報を見ると。

○新年に成て祝友社員の二幅對　新年の賀客の名札受は各家とも大体掛りに成る時

綿の平箱か木の桝の丸餅但し菓子箱の類

ふる人　祝友社の奇人、骸骨仙士、江見水蔭子は縁起を祝ふ新年賀客の名札受けに

掛ける。ちゃんちゃんこ、ちゃんちゃんこ、ちゃんちゃんこ。一種の摸

様ある古本を用ひ云々

著作外に作家の行動を新聞記事にする事は、

殆ど無かつた時代に於て、是だけの事を書れたのは、著作者の稀なる才能が之れを有つたのである。

一月四日より、紅葉が来郷の途に在る事を聞いて、北海道より、六日より、毎日平河町の小説の宅で（一六翁の来郷）で歌留多会を行ふ序である。黄金丸の批評を聞いて日記を有つた。これを見ると、実に今昔の感を耐えぬ。今の小説家は三一文人（章）が若い人達の集まる。つまり

A 10 20 青山堂西園寺印刷

順序立てる様にするのだ。

四月の「都の花」は、自分の「花守」が出始めた。続いて三十日は「少年文学」第三篇として「今戸焼」が出る。脱稿して、青山館へ持つて行つて、五十円の原稿料を受取る事が出来れば、其当時としては破天荒の金高で、持つて来ると、老母は涙を零すまで、早速神棚へ上げて拝んで住で有つた。自分は直ぐ脱ぎして、友達の外の塾へまで廻り歩いて、最後の紅葉館へ

行って、祝盃まで挙げたので有った。

二月二日の日記には「厳谷を訪ぶ。紅葉を書る。談、青木大明の事を伺ふ。自から蛇かず、義を守る為、我は不幸より」と有った。これは、前の記した冒険熱から、独中の小説子青木と遠征の契ふを結んだ。そめを指さしたので、聊か文名を得た今日では見るが、それを捨て、他日義を走るとゝふ様な事を、小説紅葉の二人に打明けたので有った。紅葉は花毋を捨て如何するかと、自分を詰責した様な覚えて

ある。丸は、帝政時代である、猶且つ他国侵略主義を捨てずあるので有った。

「読賣」は「諸国雑話」を寄せ「幼年雑誌」は「猪武者」を送った。「都の花」は連載の「花毋」は好評で、薫梅月後は高瀬文淵(黒川安治)が激賞して呉れて、いよ〳〵氣を好くした。これで有った。

三月一日は、自分一家は同じ北町の四十一番地に移転した。そこは紅葉が前日まで住んでいたのだが、横寺町へ移転したので、其後

へ直ぐ入つたので有つた。

紅葉が横寺町へ移つたのは（紅葉の家）嫁取りの準備をさせる事が待ち切れない。社中で誰よりの事業者は、柳浪桂舟の二人で、そのうち九華が二十一年に要り、虚心が二十三年に結婚した。（この拵露が神田明神の開花樓で開かれた。）崩れる、社中の悪敵者が自分を北方に誘拐した時。憤然として禁事を脱出し、下駄をチャつかんで追ふ者を欧つた。苦るる紅葉が自分の短冊を痛罵した名文章の手紙が今も

保存してあるが、公開は絶体に出来ない。

茲に不思議な記事が三月一日の日記に有るのを発見した。

花太角を訪ふ。杉浦先生及び太角兄弟

横江花和と求友亭。

とある。求友亭とは牛込の料理屋で有つた。

其処へ、れと入れ違ひに塾頭ぶた

生が門下生五人を連れて、自ら進んで入られたといふ事は、人は侠気あり作る奇異を感ずるであらうが。これは縁の有る事で。求友亭

の女将は、相川傳次と云ふ消防夫の頭の実妹で、
勤める男。新調
傳次は常い間で有るが、そんな知るか
知らずか、谷干城将軍が特別に贔屓さんで
ある事に有る。市川小
谷将軍と杉浦兵庫とは日本新聞の
を挟んで親密の関係で有るので、ひゐく
政事上の密談の際は、時として将軍は引張
られて、遠慮なく其方事は始ばれを想像
出来るなれば。それ以上は問題は無いのだけ

保存とられ既さん
明治三十四年の初夏

302

れど、先生まで自然と料理屋の閾を跨
ぐれば事は有るのだ。

江戸式山は十二号（二十三年十二月二十日）
陽り、廃刊した。それは紙業が多忙ふるで有
った。それで二月の讀賣の陽る江戸
式山の一欄を設けて、そこに掲る事の成
て。川上屋山が戯文一私を入れた。
其文中に、一念思之助と有るは、思東の事。一切現之助と
は小俊の事。一徹怒之助とは北陸。一心命
之助とは屋山の事で有った。

『錦旗』は自分は『新宇治川』といふ小説を書いた。それは[illegible]近代の[illegible]慶應早稲田の野球戦[illegible]紛糾の如く、其当時、豫備門と東京高業とのボートレースの[illegible]菖蒲[illegible]は、それは実に大変な騒ぎで有つた。それを材料ですので有つた。今まで自分こんなが非常に当り方で有つた。石橋忍月氏の如きを明中[illegible]学んだ。

8/10 国会新聞（四月十八日）は『にせ薩摩』といふ書いて、左の如く賞讃して居た。

8/己

国会雪嶺、政論雪嶺の斬く醒め、世人熱狂の情況測を掬することを注目するや、之相成り、所同様なれども事実は[illegible]や（中略）実は小生今は足下の著述に対し感服の程度飽り足らず（請ふ直言を恕せよ）然るに今度の「新宇治川」に至つては、実に足下従来の諸作中に於て優るのみならず、他の諸名家の著述に比して、遠く及ばざるを知らず（中略）足下の今度の作は、満篇是れ衷情なり、誠意なり、

熱情あり、精神あり、冒険心あり、研心あり、研文学は足下が有する筆端より出づる非ずして、実に足下の心の奥底より湧出する者あり。其勇出するや、無理に小刀細工的に勇出するにあらずして、実に自然に反照的に勇出する者あり。故に惻々人を動かすの力あるあり。如何なる剛腸も、如何なる強情も、豈に之に對して同感同情を起さざるべけんや（下略）

今まで自分に反感を抱いてゐた西月氏も、

如くまでに感賞せられる話で、初めて紹介する文学界に、自分は認識されれば有つれ。

これ程までに認識を得られる新学問の材料は旧説友社員の池田桂池（工学士。賢吉郎）が、其時の嶺偉門生の一人で有つて、同人から実験を聞いたので有つた。（当時の稿料一回八十銭）

之に引続いて『漢書』で『短篇十種』を著表した。『信天翁』『故亂水』『苦楓』『葛城山』『奇遇』『奇楼』以上の五種は皆現代物で、

有つた。（後の五種は一息入れて、時代物で終る。）

この「貴奇郎」は、小川の貞照寺で開かれた杉浦先生の降流會で、ヒントを得て創作した。

[illegible]れるので、其モデルが国府青厓で有る。

[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ、固ふず大問題を引起した。

今日では、モデル問題さんか、一笑る附されてゐるが、当時の人はムキに成つて如何るので有つた。

五月三日の「四面」「東洋新報」で、詩人の松村琴花が躍起と成つて食ってかゝる。それのみゝ

ふず、森槐南までが、当時傷詩壇の權威者を集めた星社の會で、一詩を賦し[illegible]て、勇る附論した。

頃有一年少、擬其素行、編成小説、題曰貴奇郎、吁青厓豈貴奇炫巧之徒耶、嗤[illegible]輕薄、固不足為青厓輕重也。

こんな騒ぎを成ることは男はあかつた。處が「貴奇」の編輯員では、今の所謂如い宣傳を成るので、古賀[illegible]び[illegible]用で顔をどろかと、堀内先生を初め、中井錦城、藤野式部雲、ふじが[illegible]

詩人達がこんな躍起となるのは、何か業流の爭鬪で有るんですか。と云ふ問ひを掛けられた。

そんな事は別に有りませんが、我々は社友達と云って、七八人で仲好くしてやります。と答へたが、他の連中は團体は無いかとの問が出たので。先づ根岸流でせう。と答へたのから、いよ〳〵興味を持って、早速左の如き業流別を、編輯者の人達で作製した。

34

麦畑流（一名詩人流）

森太郎。国府青崖。大江敬香。野口寧斎。宮崎晴瀾。松村琴莊

牛門流（一名小説家流）

風峰紅葉。巖谷小波。山上眉山。江見水蔭。石橋思案。廣津柳浪。塚原渋柿園。山岸荷葉。

根岸党（一名竹林流）

饗庭篁村。幸田露伴。寒田思軒。宮崎三昧。

鈴木得紀。幸田露伴。陸羯南。川崎

茶六

藤野の義務で

斯くれるものを伝製くれ上さ通信社へ原稿を送りたのが有れた。

その事情を知らずして『藤原』の宣伝する所なく引続き、当時の東京新聞は大概これを掲載した。

こゝに『早稲田文学』の第一號は事載されたが、近代人は新聞の事は知られないでみる。